

## Y7-17

### 業務内容及び実績から見た研修センターの役割

山田赤十字病院 研修センター

石谷 <sup>いしたに</sup> 操 <sup>みさお</sup>、宮門 郁代、小林美香子

【はじめに】当研修センターは、平成18年に看護学校の閉校と同時に看護師確保と職員教育を主な目的に開設され今年で6年目となる。今回、主な業務内容と実績から研修センターの役割を考察したので報告する。

【研修センターの業務内容と実績】研修センターの主な業務は、山田赤十字病院の役割を担うための、1)人材育成、2)人材確保である。1)については、当院の職員として求める能力を明らかにし、コンピテンシー育成の指標を作成、それに基づき各部門・チーム・委員会等と連携しながら研修の企画・運営を行っており、さまざまな職種が個々のニーズに合わせて研修を利用している。研修は地域の医療福祉関連の約250施設にも案内しており、参加施設数、参加者数は年々増加傾向にある。また、新人看護職員研修・指導者育成研修、医師臨床研修では事務局として研修の調整等に携わっている。2)の看護師・研修医募集に関する業務は看護部・総務課と連携し、魅力ある病院づくりと同時に、広報活動として募集案内やポスター作成、就職説明会、病院見学等の企画運営のほか、看護学生、医学生へ通信を送付している。また、看護学生支援として、国家試験対策支援通信の発行、専門・認定看護師によるセミナー等を開催している。ここ数年、看護師は目標値にほぼ近い数を採用、研修医もほぼフルマッチングしている。

【考察】研修センターは職員研修を通して、職員、職種、施設間を「つなぎ」、チーム医療の推進と地域連携強化の一翼を担ってきた。また、看護学生・医学生等と病院とをあるいは臨床と教育の場を「つなぐ」役割を担い、人材確保にも貢献できたといえる。主に一部門が担当するメリットは、業務の集約による機能の深化である。今後も「人と人をつなぐ」丁寧なかかわりを行っていきたい。

## Y7-18

### 国際活動にかかる研修体系検討結果報告

日本赤十字社和歌山医療センター 国際医療救援部<sup>1)</sup>、

日本赤十字社 医療センター<sup>2)</sup>、

名古屋第二赤十字病院<sup>3)</sup>、

大阪赤十字病院<sup>4)</sup>、

熊本赤十字病院<sup>5)</sup>、

日本赤十字社 事業局国際部<sup>6)</sup>

藪本 <sup>やぶもと</sup> 充雄 <sup>みちお</sup><sup>1)</sup>、加藤 安孝<sup>2)</sup>、伊藤 明子<sup>3)</sup>、

次田 順司<sup>4)</sup>、宮田 昭<sup>5)</sup>、森 正尚<sup>6)</sup>、

大屋 貴光<sup>6)</sup>

【目的】本社及び各拠点病院で実施されている各研修については、その必要性、内容の重複、統廃合、費用対効果、開催時期を検討し、より効果的な人材育成に取り組む必要があった。すべての研修の内容を検討、精査して体系全体の整理、再構築が本年度中になされるべきとの提言を受け、研修体系検討会が実施されたので、その結果を報告する。

【成果・提言】1)研修の増加、内容の重複、三か所の分散を避け、各拠点病院が年に二回を上限とした。2)事業交付金の適正使用の観点から経費内容の見直し、開催場所の変更を行った3)開催場所の偏りを解消し、内奥の重要性から「危機管理研修」と「国際救済・開発協力要員研修」は本社主催で実施する4)名称の統一と募集要項の厳密化により各研修間に効率的な連携をもたらした。

【結果】東京 国際救済・開発協力要員研修、危機管理研修名古屋 ERU技術要員研修、戦傷・外相研修大阪 ERU管理要員研修和歌山 熱帯医学研修熊本 基礎保健ERU研修、プロジェクトサイクルマネジメント手法研修の各担当研修を決定し、開催日時の調整をおこなった。さらに、研修体系の概略図を作成し、国際救済・開発協力要員を目指す職員に対して、職種ごとに受講すべき研修の行程を簡便に明確に提示しえた。